国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志　百五十一ノ十三

讀合点

国立国会図書館蔵書

日本一統志巻之百十一

目録

江口之事 来討之節江頼之事
附今津城一二之備之事 畑カ本ノマヽ下同
茶臼山陣取之事 城責落之事
長谷堂ノ城ヲ今津城押之事
附城方来討春日左馬介伏勢
茶上ノ山ヲ討ル事 物見西方窺働之事
対志摩守武略之事

福原達夫氏寄贈本

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志巻第百十一

江口の合戦夜討之事

附今津勢一三之儀之事

羽柴富並勘氣山攻之事

羽柴宿屋の城を攻落之事

羽柴宿屋の城責落之事

羽柴播磨竹葦のこと

とりこもる城の本人江口の合戦の為に覚悟の籠城

なれいおゝそ石疫防戦の次第

羽柴方薬み相違の体之段目録

攻しる防戦ありよいよ員死人多のみ来ふ

軍を羽柴常陸介家臣ゝ古知ゝる軍事と

有之は此宗憲か云事をもおしは會を聚りし故よ
此城力貴みは味方大分て失まじ是より山形表の
軍より行要るれ共失を不れ付回の若苦か軍出る
様之見會若形皆いうと耻しあられは皆花と同んし
十二日の夕陽おし前より若出は皆を歎とうれみく
若徒ちて如み長遅み人馬疲ま十一日若陣の日は一
の柵より三の柵までは又休息緩候らて十二日こそ終日戦
しかれと敵皆の先ななれいとて會談まゆうた先次
は大将も士卒もみの外弟気もなく
十二日まて二日の間み城内より江口あて清十知して武

勇自焼の會津皆の鼻を拉ぐへと求中究竟の
若兵を揃ひて八十人案内は知りしうな人三人究忠
若て西の陣へ赤く見物共を奪ひしとて不知伴
み寝へしを見届し閑を出とよて引返しけるを同
を掴りなからも他家の士卒と遠て押れりたりまで
素肌の武者共三百人斗走出て防しかは宿屋の城
共元来あされ見廣みてなられは見物を奪れしるも
かりを兵柄みして皆悪くしうへる如を怠をなして
三百人斗の上敵方の若兵の軍勢料て押立く若
しうける會津皆は散くみ迚も海難み付てへは祭

取まいらと揉みこんで城の濠を押埋めて
板垣こゝる治本板本をかゝ塀の上より防ぐ事冷し
江口ふこゝい継威〳〵の濃を総こゝよ
羽織みゝ十文字の鉄砲を提ゲ大将先を追ふ
敵方を続ゝ三人を実ゝ突倒を提ゲ防ぐを上敵方
春日たゝ他ゝ多勢三十人斗を
鉄砲を押込ゝ江口ゝ物頭小吉七年十六歳弟忠作
と云勇士走ゝ出ゞ見を走ゝ
人の江口ゝ助ゝよ上敵勢ゝ
吐と鉄砲をもゝ出さを突殺
口三人の武勇を上敵家ゝも感じ合ゝ
いほの〳〵と明ゝ果〳〵ゝ十三日早天ゝ上敵方の惣大
将出ゝ山城ゝ井楼を上させ見物ゝ下知ゝ事ゝ
江口ゝ武ゝ中〳〵百騎ゝ城の士卒ゝ死物狂ひと
見へ〳〵ゝ敵原ゝ中ゝ集一向ゝ
集ゝ晩ゝ立まゝ勝利ゝ
縁ゝ出張ゝ高山有ゝ
敵城をゝ城中を可悩ゝ見
在ゝ三百ゝ三百ゝ
御ゝ今津茶沢ゝ見泥舎を三
口三人ゝ武勇を上敵家ゝも感じ合ゝ
いほの〳〵と明ゝ果〳〵ゝ十三日早天ゝ上敵方の惣大
将出ゝ山城ゝ井楼を上させ見物ゝ下知ゝ事ゝ
江口ゝ武ゝ中〳〵百騎ゝ城の士卒ゝ死物狂ひと
見へ〳〵ゝ敵原ゝ中ゝ集一向ゝ
集ゝ晩ゝ立まゝ勝利ゝ
縁ゝ出張ゝ高山有ゝ
敵城をゝ城中を可悩ゝ見
在ゝ三百ゝ三百ゝ
御ゝ今津茶沢ゝ見泥舎を三

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

城の後の山へ入れよと号砲を打
ねばいけぬ物と思ひ附けいつとなく
しる物をあらく結句為盛公
候く祝ひのよと申し付しうち働の見分を
孫一らいかゝと申す頭の吉右衛門と云若者
やすしうなるを石通谷なる山へ入れる
の足跡を悪く石疲小頭と
より早号砲を四発打ち城を乞下し
や対通りの矢倉にも鉄砲大勢
皆く若もの足跡をなめい頭役の家来我勝ち

働ける石屋の城内逃候
ありの方より見廻三方の
堀へ漫撫へ付ける事
内と見くろいめる情んの
弟後九兵衛一可為人数
引ける事の叶ざる
人をも離を亡ぐ
とも討捨さるる兵士八人を
お本戸口と歩行けい裏
人思ひ切立ての

戰ふと雖ども十三人手疵を
よつて一引退くや息を注内江口の帝等十八人も早
倒れ七人痛手負ふて屓ふ事能はず
勢の戰い思ふ程み働しう候
れ候イサ引れや城内やそ死
戸志うと立籠め本丸を守
常み服捲き切や死しう
遠く果しの兵人殘うしう富森助右衛門と云
右衛門の若もの主人を介錯を仕
あや大ぜい走り出城のお人江口み主情を討ん

高勢み取うなわや大勢出
しや上杉方の大勢の中を押分やや西へ引る
の者何方へと答へを當兵そつや此首金津へ持
一揆勢出のち見みへんとみうしう早く陣中を
狼出金津街道を真出みや立退しや追
持来れと吊云るとなや
此ち孫右衛門渡邊采女正へ仕まつや富森の
家名を相續しるとこと
金津の二の丸お預修理亮
但小吉あ人や首打や亂事を聞しや先陣春日左

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

十六佐大名口の矢倉二棟御蔵の旅方立て亂舞を揚ケ
宿屋の城なき上杉方一二のお侍を以て責落し
る勇士数百の軍と
郭よき石知ると山形城内の宿屋の城の一の柵より近
の柵を支へ一番武者宿屋の城主と
敵ハ〳〵三の柵なし弘貴破れ一宿屋の城兵と
告ハ〳〵宿屋義光より清水右衛門尉を浦山形へ
まを招ク大山内猪志村伊豆守と紀伊守越前守
越前守近江守馬守猪岡伊勢守を先と
山形城の一族家老大名衆の物頭を集メて評議

宿屋一族家老百石以上十七人
垣上城を持つる士大将十一人何も多き石以上
物頭を以て名ハ三四百石を三十人有り
しとなり
此宿屋一家の衆の弟部代りの面〳〵宿屋城の後面
〳〵の評議ハ一ノ山北を清水たりの与力として中
出ハるハ江口の三騎小野の与力として先の宿屋
城を持居る事なれバ清水たりの中へ難叶ハ之見
敷〳〵みセんハ奥羽表四の郡ハ早く後詰ハ

勢在ること越と云ふ外なし
攻しかも香取・舎人・栗ヶ原ヶ越と石ヶ出の如き
伊勢ヶ原ヶるい先年京勢大乱の
頃在押へ勢多の勢負しく回く
下ヶ来西南小の武士在討滅し田舎住居の息
京勢へ十ヶ上住官并家老一族の家頭の位階等在
勢ヶ事日光の家の借奏こし由緒在ヶ日光中
納言資吉ヶ向ヶ家ヶ在勢し田舎住居の息
侍長の中伊賀ヶ武士と聞ヶ新兄お人帰海
ヶ一ヶ云相続ヶ客人ヶ弓馬の家業在

所の日光伊賀ヶい三代目迄勢代ヶ武
士優ヶ一ヶ進ヶ出ヶ勢ヶる栗住ヶ
三代ヶの悪逆在実ヶる所ヶ
詮ヶ日光のんかヶ車ヶ客屋城の論結ヶ甲斐
くしくいふ勢ヶ越ヶ勢ヶ勢ヶい住ヶ百姓人一命在
拠ヶ一揆の多病ヶ在申ヶ同ヶと詮
ヶと等しくいしくも詮ヶ早ヶ出馬表
ヶ結の勢負在ん掛自旅の面ヶ不進ヶ一昨有牧出
馬ヶい相備ヶ等ヶとヶ座中在
守ヶ石引座の中ヶ進出ヶる顔色在見有旅田ヶ

宅の家内服毒して一同自殺せんと
有りしが其の時六十六人の中より日光御田只二人手
勇敢顧みず敵兵を打ち殺し庵を
ふり通して勇ましき見へ
相模守平富並忠兵衛あん
ぬいこの石の助よしうしう
を捕へ退治を奇妙なる
没収し家を追放せんとい
たる忠兵衛連誉代のあ
十人十人家百連見届を
十人家百連を捕へ特命を

と紛疑の渡世を致す事二十年
保富並忠兵衛も六十
名没後の苦も忠の徳を
度々ことなり
と時感ある事ニ君
云合ひ
去度の唐津勢
去此の本意と山中の
在集り九十一人百連
べきと
早急敵陣へ向ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

百餘人討ち取る。加藤の家来
秋の近江の猛将いさや山北を
委先を伺う。一通の趣意書を張り
宮の十三人立花山北を
家来共一ツ印み既に周章の体を見て
山北を立方へ告げ軍評定を
右の事早馬をもって
富並右人も討死。重畳を
かな此家来合て百餘の
既ス事ありて羽列の
一九指三人の義士を見殺
る年も春帰る。先神
却て止ム早く義光の前へ出
而申ス。ありしかの山北を
なれの義光眼前の
巨の義士九指三人郡家の
右の事加藤侍る
限り申ス。是ハ
かの出羽奥列の吉来
書頭組頭をも勝功

山北忠右衛門家来御うけて宮人山北
忠屈死の追腹て切いな定と評思しかい出羽義光
忠き乱出し右衛門家を押止メ腹こそ方い苗
字ハて遣へ同腹の末なれハ大概の評詔業しかた
と云事ハ郷士ハ他筆い家の掟を破り者ハ
勿ト某ハ免しとの者ハ忠の依し奉公の厚く
奉公実義の忠告徳と事と下物と山北忠を評詔
みるい不免ハ動事ら来の法の忠告ハ免し吟味
有ハて本をなれたそなくい動義光も納ねるハ某采配ハ代る左方なとら飯
田の吟味ら満足〳〵と褒美有ハ動事ら動乱
在ハ免九十三人ら非く屈死ら
中の書る者ハい三百人豚な山北忠一家を助ハ
ハ報しハ奇特とハて愚こ仮ハ家と亀の大名分
一族ハい不及ハ家老を始メ本知の十分一ハも
家と引級の後名家ハ残ふいなとハ云ハ
なる歩迫の仁義信のあるやハ山北忠のの孫迫世ま

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

民家の血脈みやうや上杉勢の旗先も石なんして
百姓共の口上を以て何のふ存寄もなく御田の迷惑なる事
をも不顧強て諸引當を御取立なる様子なれ共近年の
諸引當の内民家より指出し軍の用利能ハ
不申と云なれ共是非なく御受申上候
斗押付られ上杉の先手迄の事一里
斗家混雑み百姓共を追立
放火焼立引拂ひ帰るみちすがら
い御田み向ひ御一番み討死
某抔い妻子親元有之の後御田日野み籠きりくと
討死仕候事なれ共御一番み退進ミ帰る上杉
方を一ト散ミ討退ミ逃ミ
或ハ時宜式代の事みよりて
言みやうみ御一番ミ討死
相撲るもち候の乳御田い潰く討死ミ出羽岡中み
名を残ミ帰みい石仏と云て
その後命の相いかの事羽黒の法印の御乳
の者い二代若死の相ミうと云
脇病ミ逃功名の事ハ
み舎津勢百近く一塊ミ成

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

なり同の下み見下し上杉方の兵羽別み蓋くり
逗留の對陣宮よりの使ふ〳〵と方事み心配し
兵馬の威を盲〳〵雪津方のつめを見を討〳〵もの
備立なり
上杉方の敵回孔〳〵一ヶ城を責れう兵功を兵馬
の威と〳〵何もの城るうもも湯み当ふて責落とも
眼宮しう知る和睦しる一旦下沢右馬助よ敵を
堂云石恐兼河口の兵〳〵孔〳〵や宮と頓を押出しる
み此節の勢而を考〳〵み山形よりも百人計百人宮落
の当而を構〳〵を亜りを多古日のはみ八ヶ所まく

歩行を離兵なく〳〵六百人半程功りみ押出す
もも宮と勢の拒て分程の敵なりう思しの俗
み孔所〳〵谷地の城み兵馬を休メる古猟よ一の首
尾如此と一方兵ろう〳〵いな亜山城るやと等しく
拒の大よ猟よ二日の合戦味方の大利の不守う諸や可
居城なく長谷堂さ〳〵責の兵落近次の城〳〵を
攻巻山形を引出〳〵大よ猟よの味方揉合せよと
下知〳〵孔の早う雑の若者も弱仕を不分我先
と九月十六日の未明七谷堂の城一押寄る勢大勢乃
亜山城るや城より十町余隔しる山の頂きよ孔登り

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

や敵味方の合戦を目の下に一望に見下し一軍使を
る事格の妙を挽ち玉へ今康方一の先陣春日左衛
門作の出立ちれしる陣の山の尾筋み備をたて
敵の様子を窺ひ窺ひ責入る躰を見て今日も
大幕手也陣所をおや名馬を休め武威を高養
ふ聞るおみ長谷堂の城中志村伊豆る家と名乗て
通者うへの石垣を倒ふ名人こしの志村う帝答み
格や走勤由大気有高作と云士の底姉北
外軍の功者成るを思有よ敵の軍位冷しきる息
しう今津路芸究や此方の営を見る事
同公今み見下しる様格いと陣の体る見通しを何し
の敵陣み通者うるを窺ひて底討ス陣ちよ深を
改しるを物到しる共芸を動百人先派るとこしか
あ人相んねいと引法や志の度しるる如中一日ちう
や物音一村雨風と降うや雨を跡雪立事涼来い文
作閑ちうスハ底討の場馬一人をい文
歩状立手引揚うや多人こうの気長谷堂の城を思ひ
出や見渡しまれい様方必の尾筋み陣れしる春日
左衛門作陣所を備を深くと人音も
なく人就見へて青の裡ゆや底出うも五の刻より

石垣を亙相の守と春日左衛門尉を差遣し、
寄手を攻めもむさまを四方一面に見下ろす
高峯なれば、敵の手知らず早く討手人に見
られ寄せ来らん事と方々に備うる事なれば思
ひもよらぬ事なれば、方々の備共に
もそろはず、其まゝ打入る備半分討入ると
いふ注進なれば、此旗本も法なれば、此旗本
陣を先きゝゝ一手毎に攻掛をせしゝ待

顔の体たゞ呆れ果たる敵の軍法之を一の先春日左
衛門尉押丸乃ち小具足にて馳入る
斗七八人連れ引き切り引き切り
も敵く切り立て追懸たる
引と見て取て返し引き入てゝ
引と取て返し引き入てゝ
や出ぬ前なる谷の下より旗本なる
方を招き集る此時春日
軍の体より一番に西方に二番に市田
弐人谷の下道を回り廻り
より切り立る事あんゝての働之

西方院い父のいぼを入ると
とも荒れい慶次郎い四人をす
拵う立一程み時のなか三十人斗側ルる小騒
民勇の者共なう宮と勢揃
河急源治ら弘兼源之丞迎云
てセんれるを迎一倉庫勢の
そんなみ〳〵見へしるい僻目う白坂を黒坊を者と
一方宮を合セ冥途への物語りみせよと
前田慶次郎不ら敢騒しき慶云ら取〳〵某
ら小勢慶次ヒヨツト泳とら名家もら敢三人の宮ら方

お笑ひ〳〵ゟ付イ〳〵ろ〳〵ヒ
と方を振う出ひ笑ひ
しう慶次郎い西方院を
の方力を以ら笑ひ
お付し方力を持る汗
い源之介急をなツトへよ
ん慶次郎を志ゟと引ル
駄き働ゐを西方院い物
ら後ら笑ひ首を抓ミ〳〵ら
目出度ら出二云と石云ル

是より慶応第四下河邊
の仙之八第四天隊の大石力
しう鳴く外も淋しく時鳥
常より弱く聞へ西方院
角の棒をふり仙之八第を歩
下駄を掛賣も賣へ梅先
とも度重ね痛も同前
へ慶応第四の名人
歩み下駄の音が首を通り宿先
賣も歩放ちへの利へ業物を

二つも成西方院の仙之八力
の石ふも有るも賣へ梅を乗通
や助るよと聞へ第の掛
院急へ聞へ如西方院の中
その走掛る狙ふ仙之八第
強い奇代の勇士と聞へ
不在西方院の梅も放れ
の荒う坊主十日斗
八第を踏倒へ踏へ遠呼へ
討と云事い四十年

[illegible]
しうと二騎三騎みゝしの
止〻なり引起〻去とやいへ
〻泳メて居しうしとこ
給るみ長谷堂の雪雪と云城中あい完竟の名所籠
りしかい上杉勢と中〻一旦責あい難攻苦戦なみ
日を重し夜を日に継ぬ斗みやい囲中の営よ方
の者共み兵糧を奪われ給るみの猶以籠城
難叶さゝいや皆み上の山の城を責よとく
大勢なみい稗村造酒之上泉主水正雪下知り

采頭と〻泳馬を百騎三ツ四ツ引立上の山へ登
ひよりあり上の山〻そしりる中の山を越〻稗村と詠七
あ人い物見山を見て陣取
しい此ものか敵不みやと歌の陣〻より詠結有ら
申遣なへ〻敵勢なる時い先陣の営ん給く一戦を
一〻との評定みやめ外ら
二まくこの寄手接陣を一まくみ分る弓矢の癖と
上の山の城あい営と嵐より里見越後る前〻より城を
しうしうい此度城もの里見越後るをい山形一家れうか
の先在き〻営事調と有り此里ん云業新田の一族を

見仕奉る孫みや足利家へ召出され
る孫の誠和より神護寺へ来る新田家の系譜
小右京亮と云へる人と聚メ二代を経る處越
後の国人上杉先祖上杉民部を補貞治年中の記
ら後の新田家の紫未〳〵の若き亜〳〵の系譜
孫有と云事を此方探〳〵来る日岡中井足羽留
下総守より赤谷村庄上総本下綱本下〳〵を流流〳〵津
川へ漂泊〳〵と出の岡みや蒲留ッ〳〵家上家も源氏の
同流なれ共縁を未但岡と〳〵新田を名乗たる今
山名名乗ッ〳〵里見い家老〳〵ろ〳〵み家上より探索分

在三ら貴家家〳〵ら後〳〵の勤ま成功な脱〳〵
八ら貴を知ら〳〵在先年此里見神後る家上ら
面形義先へ御と言〳〵と人ま上ま〳〵（延宝ら事の
ま探索〳〵出ら〳〵ら貴を私
家分ら里見神後ら〳〵ら号にあ房の里見い出羽ら
里見と云号別書みら〳〵ら神後を立退思〳〵
ま義共ら里見ら〳〵ら多い出羽る義先を里見ら
ら石義ら〳〵ら富士事を私む士な私い此度上杉
家へ縁上の御〳〵敵を引へ家上家ら号矢の宿癖と
ら御ら石知ら書ま有ら〳〵ら〳〵い里見神後ら〳〵ら矢

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の相談と云なり此形勢當國並上の山城つゝの里見の嬬子
十三人の民家お浦外源と云ふ家の勇士等刈志方
なる里見の家の子郎等よし山頂の仮民屋をこの
なれ集りおる旅人等敵りしと見へしうりる郷も谷堂
なりと云事思ひもよらぬ仮廬る中也ちかい上取詰なれ
誠恐なりしの等刈志方
一家せてうりる上取詰みよ
ことなく眼前の危津勢迫
いとも羽ついをる事必なの郷仮在安沢き等外来
陥れ石課如を先う一戦み
お浦外よりく里見家の重恩を報く
決迫とく宿屋よりの地利を捨と春の花よの責迫
付りみ石揮り等防戦の内あい宿屋と遠着城山
為を山形より援語るとしく
く戦のく味方利ることいめ何とやるを城糸ぬと
云大剣の士未庵より進む出
なるまてる等何もいう
とくともた孫よりるれい四十の者のる等あら
相変なれども無乳母ともお前母姉妹の次
先きのとく若等の家みを前後を石揮寄く出敵を

退却ん[illegible]有[illegible]相[illegible]
[illegible]山形[illegible]
見下[illegible]高屋城[illegible]忽[illegible]
[illegible]
[illegible]

力強く足軽くして猿ニもよ自由をなしぬれハ険阻の地
を難儀ともせす禽獣の如くに等しく寄手方に化し操
立しうぬ栗ノ寄手方の倉津勢ハ分路よりの兩上
に寄り木ニ長年を方しれハ猿引不自由にして進
退に便りを失ひ既に引返さんに見へしか一草刈志摩
あるか奇兵の三百人ハ皆物見山に忍ひ居たるか時分ハ
能きと見済して木の根岩角を打き合ふ音同音に
噺りたる間ハ山谷へ響き木精に答へ騒しくやゝ
猿に寄手ハ是ハ寐を失ひ敵に跡を付なせと云猿
すハ何ものか張陣と一度になさんと操合ヘ引返さん然るに

物見山へ元登りしたる草刈志摩守に付たる三百余
人の内へ拙者十人猿ノ内ニ交りて走れハ大皷を提けて
出たる茂草刈是を究竟の事ならんと木を伏せ
簡抑る事何そ可と云事なし山の石を取溜め置
しかハ先ツ木石を猪ハし落せと云より早く操合
せ引れ倉津勢の中へ落し掛る事天より降るまて
なれハ是ニ寄手頭を砕かれ足を折き溜るに如を
猪人寄の手勢四十人ハ斗死猪引詰下り巻に対る
りかれハ上杉方寄手者不知負ヲ是今こそ上杉の二代
ケ秋の兵者發軍ハなし天實弥七土居嘘をなし此方

よりて責掛りを積村か智恵ふかく擒謀らし内
に城中より赤を討出す是非も敗軍之家茨押掛て
責入ければ討死するもの城を落して赤死す物を見
るもとも云も鍋りもなり物見山へ押出して敵と討合を
赤死せよと申すと云けるか東播兵を節と折掛を左
そなき山を這上りけれは宗徒の会津勢三十人斗弥七
か旗より払をカに這上りしを引続けく赤しる太
木を投へされば将と落背後ては谷へ落石強谷底へ
室り合を果しければ無惣なる有様なり
弥七か云葉の采配甲冑の様子大将なると見るかえ

首をとらんと物見山の上より山坂に引しる強勇者なる
這ながら下り立て首をとらんとせしが弥七は石
人に縛まし罵詈しければ斤に雑りの死物狙ひに
四人と共落し谷底へ押て落しおる四人強りし家
上の兵ども重なり生捕にせんと組しをたちまち起つと
組より早く引ぬけるが三人組合しける重ね頭ら
重りんとするくと選力の谷へ将落て死しけり後
弥七が家来共は都て先へ落て先途を見届しける
はきんへてなしと云へり

日本一統志巻之百十一終

日本一統志巻之百十二

目録

家康領上山合戦上杉方敗北之事
附長谷堂軍之事
茂木原常陸介仁撫之働之事
家康会仙台ヨリ加勢之来事
附上杉勢退口在町竹田働之事

日本一統志巻第百十二

家之頭上山合戦上杉勢敗北之事

附長谷堂軍之事

并板部岡江雪斎の掛ケ合の事

朝之陣津勢の中より覚の勇士多き中より山一ツ宛を追懸さんくゝと
走出山谷川あり筆誌あり
走出山谷川あり筆誌あり
渡瀬のごとく不及是渉川にて云ふ在筋違み
山中へくゝと志とりの如く探合るゝ大勢合勝村
造酒丸軍の利害を論ず相ゝ

よりも存命にては孫七か異説の思ふ所も恥かしと猶り
云を云かけられて返し先へは引れる事不自由成る
山中にて悪しくは討れんとて返し跡より追来る
敵と打合て死する者多し不知し馬の頭を引返し
此町斗廻るに里見勘兵衛か内の一騎当千の士抜
孫三郎是も群を離れて只一騎黒具足の馬に
打乗て追進みしか穂村と觀面に寄向ひしか穂村
か伸馬の具の鮮に遍ぬ敵よと見なし若れは此程誼
抜孫三郎と名乗て穂村を書手に見なし馬の首
を打手の方へ引かせて立も寄るよと見へしか手に

引組む馬か首に落重る穂村は力量多力人と云しか
とも手勝も有と見へ抜孫三郎も四五人の器量と云れ
し兵引組と再び馬か首へ落重る所孫三郎を取て押
へしに仏利の孫三郎なれは躍起して抜くより早く二タ
突ととて起にこ鎗るを取て首取て今日合
津方の大将穂村造酒允をは伐れしと上方抜孫三郎打取れり
しうと大音に呼りしうちれは引立てる上杉方孫七は
討討穂村も討れ力を落し若先にと退立しは混乱
の体に追乃之上杉勢陣に押へし上泉主水正は先
手の味方に押立敗軍と呼りて其馬を進めて進へき

来り党を入れて一軍と真先みを立て
を物見山の上より望み見志摩を見るに百二度の繰
引の此時を遠矢石弓射敵の後陣を引寄せ
壷を見届け空矢なく射ず簇
る時を不遠上杉の後陣上泉を先として進き
くるを待巻み引退き切出で跡を追上杉方の騎馬三十騎
と倒をりめ追ひ須く上杉勢ゐ一つ如
上泉主水い関東ゐ名を知られる士大将軍春
中をも上別鉾林の掛ゐ家ゐみ許止ゐ石まで帰出

その知行を石見一ヶ国ゐ内ゐ
る方より多ゐ石の扶持まで
たる情作独持ゐて上杉家へ出
ゐ日味方の敗軍い跡より許ゐ
成とも仕方くさてい亜ゐ多物をと廣云出ゐ
八すの許ゐ跡なる大業その加
里見ゐ防み剋ゐ今死力を振ゐて切り立ゐ十間
四方へ切り乱しゐる時上方
りみ強く迫ゐ立返をしゐ
ゐて立ゐる

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

實ふ里見民部か浦ヶ側み居住し居ぬ七郎と云十
六歳の若者ありけり弾墻へ不意出神津の事ゝ先立へ
武誠度と望しか共不免して立しか上山尾崎より
出ましを見るや味方を切り巻くしたる敵を我等か
留つゝと近出しけるか此者上泉已水ハ白鷺のさし
物にて宗上方を切り乱し若物ハて血飛んて斑乃
首く白糸の鎧も緋威に血に染ゝ事ぞ古けある
龍頭ふて太刀み血の滴りしを肝にみ寄振りく居
しかりけるを宗上方の士み深山九郎兵衛と云ふ者の
方より走寄て声も不掛み廻こしたる物にガケ欠去を

跳落しころりくと遥ヶの谷へ落けるに倉京七蔵
谷を待へて転落しけるに上なる已水を縛嘘抓んて先
通し弱る所を首を落しける下なる深山見て其首
を取に渡しに九郎兵衛ヶ廻しれハとて其方ぬきて乃
拝み首をれこ走てりと起上る処を憎き深山ヶ欲ん
と七蔵ハ跳落えし居み下の谷へ転落共岩み当て微
塵に成る七蔵ハ已水ヶ甲を見れハ眉庇の上に倉の
象眼ありて上泉已水と記しけるを見て搦て今日の大
将よと甲太刀を首み添て持来し則里見に捧奉し
ける而大ひに感悦し只今之功是なりて偏に胴よとし

くる會系七疋ゟ三百石宛ニ而一方ハ〳〵よゟ
ハ方の大将秋村上泉を始とし
ハ〳〵ゟ引ハ孔ニ立〳〵る上杉勢ハ
〳〵を宮ニ方退対ゟ鳴神ゟ
日ハ暮る此ゟ合ハ一人ニ而石
十和〳〵ゟ向せ〳〵る将使若林城治亮と云ハ者
十の文なれ共父九帋たゟ〳〵ハ諏信ゟ宗綸の代ニ出陣
の無度陣中の物鬮を支配
云掟負を踏〳〵る九帋たゟ〳〵ハ将城治も十三才ゟ父
ゟ者〳〵ゟ氣遣物の文覚猶者
十七才ゟ〳〵帋ハ此度ニ而ハ者
方の大将ハ対勢数軍と見な
の真中ゟ陽ゟ石と云ハ出羽一回の名石ゟ〳〵幅三間
ゟ長サ十四丈を越〳〵此方石の
なゟ〳〵西方院早〳〵越ゟ〳〵
ゟ〳〵ハ敵の大ゟ来ると
勢ソヲヤ赤坂ゟ〳〵ハ
敵の退ゟ〳〵ハ者
ゟ近〳〵の方ハ
里見弥ゟ〳〵ハ

を始メ上杉方の侍大将多人数討死
か或意の士百八拾七人雑兵共六百餘人討れしと
此内ゟ四百八拾三人の士分の首名
義光の家来ゟ八人有之一ツ首の名を
書記し生捕ゟれし事ゟ家来中舌
家来ゟ生捕ゟれしる事ゟ家来中舌
ゟと申ゟ助んと云てもゟ一揆ゟ
哈助ゟ果ゟう何ゟ足波竹の者ゟれ共武勇の者
の言ゟい猶別ゟと感ゟ合ルゟう
勢ゟ出ゟ山城ゟい昨日上山の城ゟ向ゟしる味方勢ゟ仕

猶ゟ剰大将分の者数多討死の
心の分意を脱ゟも谷堂城を一日責ゟ可落ゟ
春日九郎ゟを先ゟゟ押寄ゟ
谷堂城を落さをてい本城ゟ
き該隊の勢を可出ゟゟ攻ゟる
出ゟるい某夢ゟ人をゟ見届ゟ
宿屋城を責落ゟゟる勢ひ
ゟ兵乱頭ゟよゟゟる弓矢の
日上山の軍ゟ味方大勝をゟ
ゟも未ゟゟ六百餘打れゟ宿

[illegible]春一宇日寇ヶ本谷堂の城を我責み落い
出定之を告い食津勢ヶ青る勢ヶ後陣とい二手み
分走りて一手ハ城内へ一手ハ寇の勇士を引具一城内へ
乱事ハ島一来ヶ加越と有ヶ評定の席を立一ハい
家之家ゐヶ
大山 本庄 志村 延沢 鞆絵 楠岡 石い家老七
騎と此外大将の事ゐヶ寇上家中之ヶ家ゐヶ
一族ゟ越しう係ヶ長谷堂後詰大将の軍役ゐ鞆絵
ゟ出るいと云ヶ程み少ゐ之ハ
水志村のたゟ一栗兵部を先として家徒の兵八ゟ騎

人鞆絵越前ゐ陣ゟしう上杉勢ゐい右屋の加勢と
しヶ先ゟ山形ゟ来りしる事ハ歩ヶさゐ延
帰りしと云ハ此後思ひ寄ゟ来ゐ勢ゐ
ヶ来と云ハヶ石和長谷堂ヶ責掛る把軍の体頭ゟ
溝口左馬ゟ外軍ゟ於ハ京常陸介ゐ留ヶ山口軍
を進る事前ヶ上杉家の備と違ひ乱斗を先として
敵を悔る事ハのみ之家ゐて出羽衆別ゐ名
を知ゐしる勇士多ヶ人数持の大将ゟい上杉ゟ
多かるヶ一騎懸いゐ分別の事かとや
ゟ杉原志摩ヶ云ゐ事なゐ

當家の滅亡い迫きみのうと見へ候日本岡より名
を乞ましるよう秋家の使を遣よう事不及是非
いまだ形の際白みず万事由比ヶ人みな当家を仕せ
並一人の当先を当家危しとの陣上条氏
始お浦義春ない由比ヶ浜云し
事七日本岡み吉来より久
来と見えたのく由比ヶ
舉論みるふ云ふくる由比ヶ浜西方院
前田慶次郎吉通物ふ使一
事を用しるへ七谷堂堀中

城責の由江ゟ諸人ニ申て追落さんとせし知を請諸
家来須田長義八百余人様節遠ニ并会津勢も駈て
切り乱しけるに援一人として生所なく見へさり
けるに余りに強く討捕立て八千の山形勢後し物別
きして兵馬の息を継所へ又白川繁敏ゟ一備七百六
拾余人を以て寄を掛りし時ハ山形勢八千余人並三
町討更立此所山形勢を三百人斗ハ討取しかハ上杉
方の又白川勢も百又六十人討死と見へて一手ニ色出
ハ負しかれハこれ類を五足も渡甲ニ至る迄血しとき
ニ成て息継居しり宗ゟ方難延越前ゟ下知しけて

会津勢ハ小備なれとも人数おし引包んて討れけれハ
若きよ此所にて上杉方を来てハ山形より押寄事
不思寄日比出羽国にて廣云吐し人々ハ今杉ニ成しの
軍ニ手柄を取し武勇ニ誇られよと采配を上けて察
出しく所を勇メ又兵馬を纏る所へ後軍の備より
上杉勢の中ニ名ても西方院一人馬寄出し浦田代
と馬勝ひの兵を寄せけるとも夫感なれとも六千石
の指色ゟ馬なくてハと馬一疋調ひしゟ此度ゟ寄初なり
河の宗よ勢を跳ちらし捨んと云も不敵八千の中へ
只一騎味方の続く援ゟ出ても構ハて只興伴て寄

入まいらせんと押れ出たる赤坂を本陣と定め諸手の軍勢を集めんとするに元来雨と不慣なるの坂をなれい工面倒引下りようよく雨の止を見計ひ引進むに家之方の高嶺を水通し敵ぶと走り掛り攻れのく下原より突入攻れ引くを一挙みれようよくおき攻より先を生んと進むる松軍の備より駆付くる上杉方勇士多くして山形論語の路二手より進む者共一ぱい難所をたゝかひ追々と出張るを見て松平常陸介もまた一押掛らや味方勇を揚んと急き責ひ

らんとする本陣勢の論ようと鬨の声を聞くや上杉方春日左衛門をもつて一度み心と為を言ひ出ける本陣を助るを不成別くみ合をしう

諸手の出江ら本陣大将軍と見へて松平常陸介いけ坂の孔を過ぬん時味方を掛んと心掛しうえ本陣を去立給よりしてなる三百人回まと名分て百石一人み村くようまを出し一挙る軍をおよう陥出し集る本陣姫路姫路のまを出しんとや付しの六百人路姫路と名家掛と出くる者もなく

の長百姓の武者の宗地通き斗出ーっいゆるー
るの中より足掛を右の掛つ程を右の膝さを
その高二百人勢容よ九百人
を陸奥をこの小荷駄馬
ちく包こかくまやや垂しるをそれと相図の下知
より九百人右後拵筒みや
馬常り早乗配ちくみくの山形よりの加勢
後詰の後ゟ駆より早乗歩みー合なや歩せられ討
死数右知山形勢ゟ六七百人
垂ひり勢をお拵く長谷堂の城へ案内
仍を垂ひり本陣の後ゟ駆より候人有うーっそれ
討死も動百人斗みや本の陣場一所ーる九百程
の張拵い箕よみ羽と又庭を張るみ山をれや
備ーっい山形の後詰て長谷堂の城も近年事
右図此高松示り備立の見事さ近年ゑ聚り
垂ひも拵の勝り馬常常陣ゟ後ゟ陣員
の場へ原右みあるー濃ーを松示馬のよみや雫
庭(クラ)なうき乗配を懸様みや垂ひまいこ高かこ
本陣越前るり立縁も九いる様なーかる生ー発つを
を此高の生きられめ雫を助へかくの馬より下りや

一揆を云答の果ら京勢仕舞候り
指示ら軍を分いまる和のは仕舞〳〵と云〳〵み上杉の
き人ら〳〵恐ら出ら申候〳〵
う早

山形勢二ら成ら捌ケしる三ら勝の形い上杉在
軍の体より有ら出〳〵強敵の半谷堂
一人ら事石成ら負死人ら出来〳〵悪く山形に
引れる

勢ら長谷堂の城中い引くる兵粮二ら乏斗
みら〳〵籠城もるなく十日斗い人数内ら城の

落なる谷田の晩米を引ら二日い三十日ら四十日も姫こ
兵粮ら上杉勢なれい迎宮上頃在陣三十日い叶
ますと称ら〳〵如一ら石見の論語近〳〵ると云
兵粮も持ますす此ら内ら三日四日の内城米を
悪く〳〵ら倉果ス谷田の鳥屋蕎
城早速有舎津勢押迎ま内ら田を刈れる虫ま事
石成ら内ら城中ら舎飯〳〵るい魁迎論有
るやい米穀をよく倉減〳〵るい我〳〵論有
こ為ら〳〵の定メ杯みて入ら留みてい長谷堂
ら退〳〵ら舎津勢を退〳〵下春の如城攻

巌急前後の不等なるまゝ歩の歌を立夫んで就
つまり[illegible]のみ敵石の歌妃は
いこうみ今老石孔宮城内一訴一条乃しうり必ずい谷田
なて刈れと云ーかい宮来よう籠城ぶるの者ども
何を迷然も万宮人の騒み西来り創てなる感死
とと云えその之然ぐいちなめぐ何とも謀の谷田を刈
訴納いはと儀侵ち儀延越前もい大よみ引れ
配り一四よ文百人なるんぐの話れの揚なはと城内

みや定ノ宣中み城を出ーを見ず亜江山城るい是非
一戦と倫ぐの大将を集メ評議ーる在掌落か居眠
なめぐ亜江まい大損ぐ城中よう谷田を刈み出ろ者
沙万人れ巻居るい知れその事と定ず城米石足と不
思せ云筆用ーる報い刈れぐんれる姿と戦を儀い十死
一生の合戦よの必形勢い攻定よ左振有ぐ毎日ぐの
味方も員歩死大ら出来るう法よ者のも柄み石てを
奪ら兵粮の為施ら城内の者ども刈ぐを岡山一運い
せ亜ぐ世方へ九ーやさんと云ーかい亜江歌笑ぐ教示
も成功いの九ら人の刈れる稲を何んと話ーるく

前の物と成るまやと云ふを取ふくろと訛
を是に先き立れよと出江陣中尼害を石可掛松ふ一人
の世話ありく某ふもの若斗ふ
三千九百人の鉄炮の者共みな貸被ふを筒を源一番
細みと倉ノ谷田の下（ヒ）より一きるて恐一きれ
那ふ城内より出ふる晩稲刈れ山形勢の方ゟ小出掛津
一栗兵衛ふ人の足軽中ゟを引連ふくみ源を獨ふ先
稲を刈れふる如春のかおせよと松方の陣中より
奴んこせた源俊の体こ一ふ松勢のヲ皆ふい流
石彦庫ふ米岡祖ふふ陣中兵粮ふ山と
是へくふ郷ふふ山城編越ふ
一来るよふ一度みれよと云出一きれい皆ふく
谷田の晩稲を刈よる事ふ
くよ尚ふを仕事ふ方勢ふ
云ふ物ふと我なふ刈れ仕
養笠の百姓共影一下道ふ
九旦一ふ士元進認ふ
ふ百入れふ仕付一ふ
松ふ帰りふ手負ふ
りふる屋山形勢ふ振ふ向ふ

み如在のそなの己等い似る笞此方いれる笞と潜し
事み呵る内み蓑を脱捨く九百人上道下る谷田
一方を押れ早一筒先揃つ歩立一つい山形路もつく
と七八百人計歩倒肝を洗し引れんとあるを小出
掛陣少衆無勢い踏止し者共百姓体の大成しる歩立
らんや近る事いてるとも止る中あて中堰を渡し
俗の難近越而大る先より百姓共の駄籠と引よ敵人
虹のそくみ押来るを三番洗鉄砲より早くうち放
みお招み矢次い近しみ八百人敵
歩倒しまれい難近見や俗う敵し頭内百姓共の跡

蛇とい石ん〳〵住るくあしるる西雲老共い出先導者よ
らん早一勢こ引返しくとい今石足み成そ引
を牧原常陸介満日た馬三番相添し柏軍斎兵の二備
三ん人を三み方ヶ城なて責体み繰出しるを見
や長谷堂城内スハヤ寄み谷田を歩捨を虎口
を持堅メよと下知しる内み件の九百人の跡鉄砲の
者共い山形勢の刈溜しる晩稲を不残うち脊屓
や下道一目さ引れりしく吉迎いく斎代の智謀と
敵も味方も感しる杉原常陸介馬寄り出し大音上
や城内より刈れり詞稲そ汐引れ〳〵い山城の浅名

如何とも仕方なく奪れいみゆる
し事故なき故なき持ちいてこの
京常陸介方へ急ぎ知らせると聞き
堂此惣果去とも神奈の松永
急しうと評議しるも次とそれ
那ら上杉方も手ひくる容れ
路ひ冷しかりる如長谷堂を
上山城を責るとも向手も苦思ひの
辛たら上山路み討れ後軍しまるを
路てみ路ひ知れ亜しまれ去亜
是迚〳〵去谷堂を責落と退ヌ松永常陸介軍を
みる希をの諸を思〳〵谷田の稲を苅りして城内
へ不入る為長谷堂城中兵粮
を拘んと評議ありの本庄より
強盛の物頭ある木下頼ると一
豊松み左内頼より丸ひ〳〵山形より大軍を出さい
跡を相援救之実と義光一族帝富を集メ衆評
し此と早〳〵仙台へ加勢を乞て一両日の内の厩よ
り棚なれい亜見ちぬ苦なれ去事来ず西有此
見除ると見へしうぬ何ぞ〳〵相談ひ

しみ嫡子家と源氏をも義康此すを受ける家人
をきいてい政家あるうちまきれい某也みを部
お掛ら来て御父の方よう
返事の挨拶なれい石黒盛
馬二疋と金沙立の使ハ人半めや焼山誠をあって
仙蔵きられり翁なれい早速家う
急ぐ君の沢左ハ必ず見次きて猶との事と政宗
嬢を叔父といふも近年石中世挨拶なれい叶ら盛
と申ける左ハ食小十郎左みハ旅メルるい叔父といふみみ
嫡いるのをと云や叔父ふ
親孰の中あてかとい石河頼ス甚と云叔父和なれい不
不足ハ信長ハ信長ハ貴しは時武田定綱の民政氏也
武田家の跡を乱ハるを筆く
遺児ある方と云なれ小栗又右衛の世へ
ら叔一河なく独立の家と源
早く宿かうや山形の跡ハ
栄を跡取郷い仰を受加勢をつきあ節ハく
家と源氏ちま義康（同馬して
家より婿加勢ト伊奈を彼る遠義個馬る石川源義を

大狩をも兼ねて勝軍山の麓迄歩行にて越後康い仙蕃よりの出勢を見屈の義兵一手ゆゝと勇の鞭をとゞめ仙蕃勢よりも先を進み山形さして攻めんとする姥山を越る者石川弥三郎ヤルるい此如より一騎二騎づゝもとゞめ押次第に会津勢の方が山形への加勢の来等たい勢の見勢り仕うとゞく七ツ人いまだ方七ツ人云見ゆるそのこと押分諸処の行列正しく沸き引せ押分事山より下りてい谷道に掛ケ焼山へ上ゞ休ミ日出ぬより日ゝ次迄引もて石打ゆる伸よんせ一ついい

上杉勢い遅み是を見渡しをゆる影一の勢や拗い仙蕃より山形への加勢ゝて三方来るを三方ゝと急き勢の見勢り仕うとゞく

一実上盛ヨり仙蕃ゟ加勢ゟ来ル事

附上杉勢退口百町位田御之事

聊るみ山形おい仙蕃よりの加勢速方魚氣一度み引立しより山形方ゟ加勢来り勢ゝ猶別みゝみ成る事を聞ゝ自然ゝ討出とゞ実上出羽る義光三方の勢な率ゝ一万山形を合ゟ士大将物頭思ゝゝ迄付ゝい騎参軍勢ゝ七谷堂上杉方

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

の陣れる多里ヶ浜東方大利の飛脚来る
知るみ上方石田三成手負数多討死
事実別相馬領を廻りて只今到着の由是別
家康公築ヶ原より利運翌十六日の辰一たゝと云ふ
宮上方陣中吐と驚き仰天の加勢の辰一告ると
石田方より脇宅の使者徒来鎖りなり依てイサ知
ず今津勢を押寄さんと家上方の者共勇み進
を大将義光清水山北を通と相談ありける内府公利運
の上の宮早今津勢の後詰の眼赤知れる事之今津
勢の引足を討れを見なから味方の兵を失ん
ことまるに無茶の如き今津勢

安藤ニイテ馬より鞍垂六具を置メ上杉方の引ふる
今やくと待居ろ
朝や六日宮時垂ヶ山城ヶ陣へ今津より早歩来ッて
築ヶ原表味方石運上方勢敗軍と告来ろしかい
只今を勢ひ助ける今津勢の陣中引つゝと静ろ退ろ
や暗来ル燈の消しも前やと見へ今為後ゝ
皆扉と走入ぬ今為後ゝ皆ふ
山形勢へ押掛や一揉揉攻して退口の一戦を快く走へ
しと憤激しるといへとも勢八よない下知る陣ふ
といへまるに無茶の如き今津勢の引足を討れを見なから味方の兵を失ん

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

い江尾の亜江ら下知ら此よい急き合津へ会保ッて法
屋形京勢仁の先々迄を見届んが物なと云み斗の顔ゟ
在松京常陸介見定メ者ゟい亜江ゟ見ゆ〳〵も迄の北中
喜い一台斗の両勇なん掛ら君京勢此ら吉ゟ者ゟ
て石高るいめ何ゟ〳〵ゟ舎津へ兵馬を進ー城〳〵
の大将ら徒定の奥ゟ者を出ー上松家の安倉相談
ゟる事此ら者の忠高ゟんと亜江を動ー松京の忠云
ゟい亜江も石ゟ処ゟ兵馬を進ー城〳〵
人松京ゟ向ゟトるい京憲のる留取ゟ〳〵
志ら品ゟ此ら法をゟも石敵ら引ゟ悔ゟい味方の勢と

て動潰の家有ゟ〳〵遠中の一戦も有ゟい敵軍も江ん元
二三日も経ゟ〳〵陣掛の前後を引縮ー軍をんよ持ゟ可
石立退ん討ゟをん事品ゟまゟ
味方の上方勢大屓敵の洲東勢利運と有ゟい退
幕ゟゟ元ゟる事ゟと流石度〳〵の場負あ花の
退口ゟ亜ゟ事ない〳〵静ゟ退口をあ度ー武具
馬具を乱さ陣掛を江ん掛ー〳〵組ー石ゟ万勢の
亜江ら者表出張の舎津勢引〳〵と六具を出メ引ゟ
を敵退歩ー〳〵ゟゟ軍をんゟ掛石て志と示ー合陣
掛の掛ゟ亜抱神妙ゟ慶を一ツ石捻亜小荷駄を申ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

引包ミ退口の跡沢鑒査の事あり及町方屋敷附
合小弟谷場へ道此者共より至極の文通度も為
諭信ぜざる様押の道を以て〳〵下知〳〵て安誠
度も行校系の儘〳〵属〳〵来ること
〳〵や甘早大極勇の西方院前田慶次郎在先と
申〳〵一手や二手あり上方の軍旗忘れ〳〵如此
ハ出羽奥列在一条あ事迚〳〵志〳〵の事衡うてくは
事を汗例ある云事をなと勇ミ誇うし勇粧も
九月十日以一日ハ築本方の方勢敗軍
とゆ〳〵うも是勝麻〳〵投首のてく陸ら物る強さる
上杉勢家多容〳〵るい奥、忘れ早竟滅亡の基と人
〳〵肝ら首〳〵なこ
勢ら倉津勢引立事あも是元在石治孔の高の前後
の備割在ら
一春日左衛門佐
二多賀谷隼人亮
三垂江山城守
四多賀谷縫殿介
五板倉常陸介　小笠原
六溝口左馬介　遠江

七　退口まで

谷場ノ道　百町右備亮　佐田舎人

為ニ示ス一合セ一ぬく退口の三まで云ふ人のまを
連ニ引ニざと跡ニ下ツニ引れ居るかゝる道化りの
高瀬多イ仍ち志ごろの成う道押ニかゝさう一在家
上方より退暮ニ途中を討んと云ふ人斗退掛ニ有う
強馬立石強歩の武者ニ人計ニ上杉方の三
百余の胴勢の引立石松嶽なる在是ニ疑兵の後詰を
打ニ跡より助ニ来ニ方の強馬武者退
掛る事速なりニ上杉の歩立の少も悪ニ退見を出ニ
攻ニ上杉勢一人も除さる事なれ共ニ上杉方の後詰
ニう上杉方の後詰百町右備亮竹田舎人帥ニ外ニ在見
て惜き宗ニの者云ふ上杉家
な敵ニ敵ニ在掛ニ入る事ニ一度もなニ崇ニ在れて
退ニ石ニ一戦ニ仕退ニうと云イサと云ふ在掛舎人書
ニ百町竹田馬の頭を引退ニ敵ニ向進んで三ニ人の
上杉勢方ニ足軽中るゆゝ敵なるも押退ニ
山刀の敵ニ在持ニ顔面ニ向ひ合ニ仕引ニ
直ニ山城ニ仕高山の強成ニ一押退ニ敵ニ
引上ニ一ニ此ニ在見ニ艶ニ百町竹田ニ成ニ

人の前〻武勇を志し事ある時後人の中まで跡を慕ふ者ども
ものへともも引張ぬいなし勢三千の未申向ひて
軍ふ成ると馬上より十町竹田出雲の指揮神
妙み見へしう去ぬるゝ武名の働みゆゝ引れる程
とや合せよるよい早く引上ゝ此ゝ近付
ゝや後ゟ百町先馬上ゟ一騎ゝ追掛ゆるゆや
武勇と遠ゝ上杉家の恥を雪ぬるゝ者〻下知して一騎の
おもゝ乱ゝをゝてゝいま中間なゝ
合戦い適して漸〻討死をいつを境内と言葉よ
なゝ勇士ゝ惜ゝいゝみ

士役足軽い勿論の事まゝ
も退我ゝいゝ負同然ゝ
討死み勢る事なゝ出羽の国み名を
指ゝ敵を待ゝ強馬をい
を突足を切ゝ落ゝ落ゝる
歩行武者ゝ引組んゝ首ゝ高名よ
屑る事有んゝ重畳み下知して
をゆゝまのゝしるの数多勢百人もらくゝと指ゝしゝ
士の指ゝい敵をゆゝ去る事ゟ
ぬい不ゟ持ゝと口説ゝを谷場入道下知して

力を同じく仁持長短い気の持様を山力を指き持て
と云ふ云ふ仁ねいと云も石敢当人みよう当人位まて
の山力業い者ず士分の地とそのようも際紙山力を
指持指へず物当しい例しおき庚者之亜江の使
当仁ず此者云ふせ石町竹田を相えいとトれい（ママ）
山城るやも石敢指教しおい石ず成と月岡八高云
亜江の物頭み張処多指挺為持きしるを見てみよ
のよ指仮より古挺三十挺ず合力も一程み僕の間は言
挺の張処来しいい居り当しる石町仲田ゃゆしる
も一人勇ず見へしおきと来り一家と方の退よの

強馬武者六百強只一散み家人入る仁仏をる五百人
のまゆしる一走く三人三人家私飛揃ず馬の足をおず
前一扉を突しうち一程み馬い繋き飛ず立人を
そね前一しる左右逃避へず首をれり一突き突てい
切り前一の当百人のまゆしるも七指人斗討ゃ
突ち方の強馬武者を討事四百十七人ず為る亜
亜江の本陣より助ケ当来り一月岡八高の張処を一面
と一当百挺弘付ると石左右一立られ先を突ず押
早一散くみ歩よりれい時のち当突ち勢四百人迫
く歩歩倒しい強陣当ち中退よ留る着陣

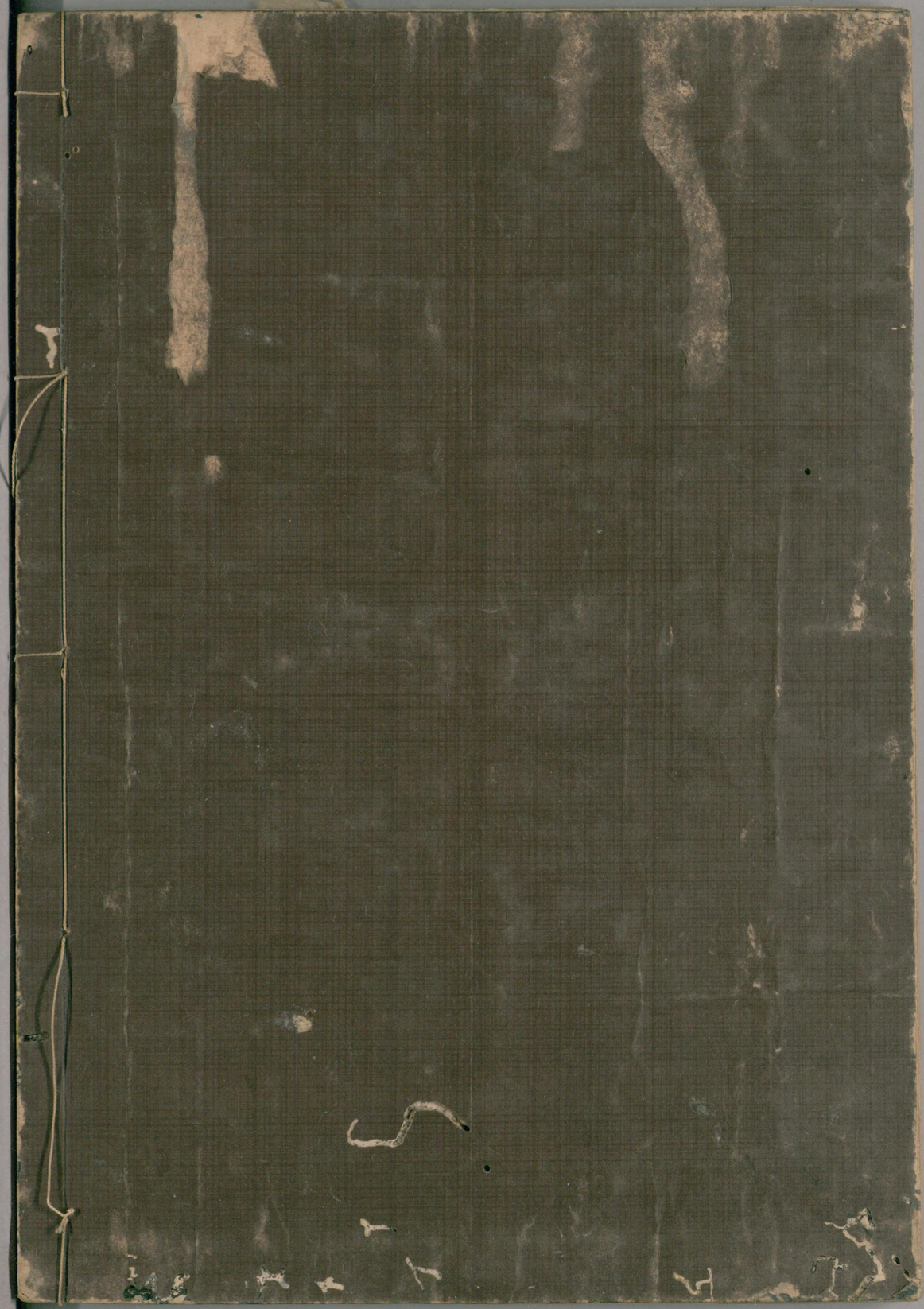
特 3
1

日本一統志巻之百十二終

常山諸侯領内ニ有之山川
但古蹟ニ載ル所ハ上杉足利ノ分ニ出ル所多キ
ニ百廿九人ハ悉ク出ル所ノ名ヲ略ス

藏書之記
幸田氏

ハ道之ヲ見者ハ之ヲ捕ヘシトアレハ
歟ノ甲書ヲ以テ捕ヘシヲ為ニ
是ハ〳〵ト不知ヲ知ル
ニ百人ノ内七拾人ハ対馬ニ
皆有四百拾二人ノ歟ノ甲書ヲ
甲斐ノ證トシテ
士ニ百人余出来ヤ古今ニ
依テ海中ノ為ニ
ヒトシク宝ト退口ノ褒美トシテ
是ヲ以テ上杉ハ小身ナ
貴ヲ常ノ農工商ノ業ヲ



国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用